

天台智顗の生死観

木村 周 誠

(大正大学)

天台智者大師智顗（五三八―五九七）の生死観、凡夫衆生の煩惱生死に対する見方は、「円頓章」として知られる『摩訶止観』（以下、『止観』）の章安灌頂（五六―一六三二）による序文に、

圓頓とは、初めより實相を縁ず。境に造るに即ち中にして眞實ならざること無し。縁を法界に繋け、念を法界に
ひしう
一す。一色一香も中道に非ざる無し。己界及び佛界、衆生界も亦た然り。

陰入は皆な如なれば、苦の捨つる可き無し。無明塵勞は即ち是れ菩提なれば、集の斷ず可き無し。邊邪も皆な中正なれば、道の修す可き無し。生死は即ち涅槃なれば、滅の證す可き無し。苦無く集無きが故に世間無く、道無く滅無きが故に出世間無し。純ら一實相にして、實相の外に更に別の法無し。

（大正四六・1c～2a）

と述べられるように、「煩惱（無明塵勞）即菩提」・「生死即涅槃」とする無作四諦、「實相の外に更に別の法無し」とする諸法実相観に基づくものであることは多言を要さないであろう。

周知のように、三大部等の天台諸撰述において、諸法実相は「即空即仮即中」の円融三諦として示されるが、その円融三諦について、『法華玄義』（以下、『玄義』）は、七番共解・標章第一に、

立名とは、原、聖、名を建つるは、蓋し深を開いて以て始を進め、咸く視聽をして俱に見聞を得しめ、途を尋ね

て遠きに趣き、而して極に至ら令めんが爲なり。故に名を以て法に名けて衆生に施設す。

分別とは、但だ法に施妙有り。若し隔歴三諦は施法なり。圓融三諦は妙法なり。此の妙諦は本有なり。文に云く、
「是の法、法位に住して、世間相、常住なり」、「唯だ我のみ、是の相を知る。十方の佛も亦た然り」⁽¹⁾と。

（大正三三・682a）

と、「法」とは衆生を極に至らしめんがために「名」を以て衆生に施設される「法」であり、『妙法蓮華經』の場合には、隔歴三諦の「施法」ではなく、本有の円融三諦の「妙法」が衆生に施設されることを示唆している。

だが、唯一佛乘を主張の根幹とする法華経が、いかなる理由から円融三諦の「妙法」を施設する經典として理解されるのであろうか。⁽²⁾ 本稿では、一乗と円融三諦との連関を検討することによって、天台智顗の生死観の一端を考察していきたい。

一 「諸法」と「境」

まず、先の「法」についての『玄義』の記述を参照してみると、円頓章に「實相の外に更に別の法無し」とされる「法」は、単に「存在」や「現象」を意味するのではなく、円頓章それ自体が四諦の問題を論じていることに示されるように、諸佛の教法（名）によって、衆生が始めて苦集滅道の四諦因果にある存在として見聞に至る「法」、すなわち衆生自身の境界を「法」（衆生法）として示唆するものと考えることができるであらう。⁽³⁾

このことを『玄義』の記述に確かめてみると、『玄義』冒頭の序王では、

言う所の妙とは、妙は不可思議に名くるなり。言う所の法とは、十界十如權實之法なり。蓮華とは、權實法を譬

うるなり。

(大正三三・681a)

と、『妙法蓮華經』が主題とする「妙法」とは「十界十如權實之法」であり、また「蓮華」とは、この「權實法」の不可思議を喩えるもの、すなわち『玄義』卷一上・七番共解の標章第一に、蓮華喩を釈して、

蓮華は奇多し。蓮の爲の故の華、華と實とを具足するは、實に即して而も權なるを喩う可し。又た華開いて蓮現ず。權に即して而も實なるを喩う可し。又た華落ちて蓮成じ、蓮成じて亦た落つるは、非權非實を喩う可し。是の如き等の種種の義、便なるが故に、蓮華を以て「妙法」を喩うなり。

(同662b)

と述べるように、十界十如の「權實法」が即実而權・即權而実・非權非実の「妙法」であることを喩えるものとする。さらに、その「權實」について、『玄義』卷二上に心・仏・衆生の三法に約して「法」を広釈する中の衆生法妙では、今、權實を明さば、十如是を以て十法界に約す。六道四聖を謂うなり。……(中略)……。此の一法界に十如是を具し、十法界に百如是を具す。又た一法界に九法界を具すれば、則ち百法界千如是有り。束ねて五差と爲す。一には惡、二には善、三には二乘、四には菩薩、五には佛なり。判じて二法と爲す。前の四は是れ權法、後の一は是れ實法、細しく論ぜば各おの權實を具す。

(同693c)

と、謂ゆる十界互具説を用いて、「權法」(六道三乘の九法界)と「實法」(佛法界)に二分される六道四聖の十法界が「各おの權實を具す」ところの「權實法」であることが示されるのである。そして、これに続く記述では、

然るに、此の權實不可思議は乃ち是れ三世の諸佛の二智の境なり。此を以て境と爲せば、何の法か收めざらん。此の境、智を發すれば何の智か發せざらん。故に文に「諸法」と云う。「諸法」とは、是れ所照の境の廣きなり。⁽⁴⁾
「唯佛與佛乃能究盡」とは、能照の智、深く邊を窮め、底を盡すを明すなり。「其智慧門、難解難入」とは、境

妙を欺ずるなり。「我所得智慧、微妙最第一」⁽⁵⁾とは、智と境と相い稱うを欺ずるなり。（同693c）

と、法華經方便品に「唯佛與佛乃能究盡諸法實相」（大正九・5c）と説くところの「諸法」とは、三世諸佛の權実二智所照の權実不可思議の「境」を言うことが示されるのだが、この後の『玄義』卷二上・迹門十妙の引証に、

二に引證とは、但だ迹の文を引きて、尚お本の文を引かず。況んや餘經を引かんや。文に云く、「諸法如是相等、唯佛與佛、乃能究盡諸法實相」と。「實相」とは是れ佛智慧門なり。門とは即ち境なり。又た云く、「甚深微妙法、難見難可了。我及十方佛、乃能知是相」⁽⁶⁾と。即ち境妙なり。（同698a）

と、同じく「唯佛與佛乃能究盡諸法實相」の文を引き、唯佛與佛（佛智慧）によってのみ究尽される「諸法實相」の「門」が「境」であることが示されていることを考え併せてみると、この權実不可思議の「境」である「諸法」の佛智慧門としての「實相」（境妙）が、境妙段の記述⁽⁷⁾に示されるように、法華經の場合は、その独自の所説である十如⁽⁸⁾によって、また藏通別円の四教では、十二因縁・四諦・二諦・三諦・一実諦・無諦等の「法」（名）をもって衆生に施設され、四教による段階的な教化を通じて、衆生は始めて衆生自身の境界を法華經十如是や円教の十二因縁・四諦等によって把握される「妙法」・「境妙」として自覺し、難解難入の「實相」（佛智慧門）に入ることができると、このように諸佛によって施設された「法」（名）による衆生教化の過程を理解することが可能であろう。

さらに、『法華文句』（以下、『文句』）卷三下・釈方便品も、經文の「諸法」を釈して、

經に「諸法」と云う。故に十法界を用て釋すなり。……（中略）……。十法界に約すとは、謂く六道四聖、是れを十法と爲すなり。法は無量と雖も、數は十を出でず。一一の界の中に復た多派ありと雖も、十如を出でず。

（大正三四・42c～43a）

と、無量の「法」も六道四聖の「十法」を出でず、十法界それぞれの多派も「十如」を出ざることを示しており、經文の「諸法」が十界十如の「法界」、すなわち衆生法を示唆する語として捉えられている点では『玄義』と全く異ならない。また、『止観』卷五上・正修章では、所觀の「境」として陰入界・煩惱・病患・業相・魔事・禪定・諸見・増上慢・二乘・菩薩の十境（第八の増上慢境以降は不説）を挙げ、最後の二乘境と菩薩境の部分のみを引用するが、

二乗を法界と爲すとは、「但だ空を見て不空を見ず、云云。智者は空及與び不空を見る」⁽⁹⁾、「聲聞法を決了すれば、是れ諸經之王なり。聞き已りて諦かに思惟して無上道に近づくことを得」⁽¹⁰⁾というが若し。

菩薩の境を法界と爲すとは、底惡の生死、下劣の小乗も、尚お即ち是れ法界なり。況んや菩薩の法、寧ぞ佛道に非ざらん。又た菩薩の方便之權は權に即して而も實、亦た非權非實に即して、祕密藏を成じ、大涅槃に入るなり。是の一一の法は皆な即ち法界なり。是れを不次第の法相と爲すなり。

（大正四六・50a）

と、「底惡の生死」、「下劣の小乗」を含めて、これらの六道と三乘に渉る十種の「境」が、いずれも即是法界の「法」として捉えられている。さらに、同じく『止観』卷五上・觀陰入界境の觀不思議境では、

此の不思議の境、何の法か收めざらん。此の境、智を發するに何の智か發せざらん。此の境に依りて誓を發し、乃至、無法愛なれば、何の誓か具せざらん、何の行か満足せざらんや。説く時は上の次第の如し。行ずる時は一心の中に一切心を具す、云云。

（同55c）

と、先の『玄義』と同様に、止觀の所觀の「境」が「何の法か收めざらん」・「何の智か發せざらん」の「不思議境」として捉えられている。これらの記述からも、智と境と相い称う「佛智慧」（極）に至る「門」として、その「實相」（境妙）が觀じられなければならない「諸法」（境）とは、「因果隔別」⁽¹¹⁾によって六道四聖の十法界に類別される「衆

生法」であることが裏付けられるであろう。

二 「實相」と「諸法」

だが、法華經方便品の「諸法」の語が、六道四聖の「衆生法」を示唆するとしても、その「法」のいずれもが権実不可思議の「境」であり、十法界を具する「妙法」であることが、どのように法華經に説示（施設）され、どのように即空即仮即中の円融三諦と連関するのであるうか。この点を明らかにするために、次に「實相」についての考察を進めていきたい。

まず、「諸法」と「實相」との関係について、『玄義』卷九下・顯体章は、

第七に遍く一切法の體と爲すとは、觀經に云く、「毘盧遮那は一切處に遍ず」と。一切は四諦を出でず。大經に云く、「佛の説かざる所は十方の土の如し。説く所は爪上の土の如し」、「迦葉、已に説くは是れ四諦なり、其の未だ説かざるは應に五諦有るべしやと云う。佛、無しと言う⁽¹²⁾」と。但だ是れ四諦に無量相有るを言うのみ。若し然るに廣く開すれば、即ち四種の四諦を成ず。具さには境妙の中に説くが如し。當に知るべし、苦・集の世間の善惡の因果、道・滅の出世の一切の因果、悉く實相を用って體と爲す。淨名に曰く、「無住の本従り一切法を立つ」と。此の謂か。然れば所依之體は、體、妙にして異なること無し。能依之法、法に眞妙有り。諸法の相待は分別して知る可し。五味に歷りて眞妙を分別すること亦た知る可し。開眞顯妙、亦た知る可し、云云。

（大正三三・794a～b）

と、觀普賢經の「毘盧遮那遍一切處」（大正九・392c）、維摩經觀衆生品の「從無住本立一切法」（大正十二・517c）を

経証として、「一切法」は四諦を出ざるものであり、世間苦集因果と出世間道滅因果の「能依之法」は、四種（生滅・無生・無量・無作）四諦の「鹿妙」はあっても、「實相」を「所依之體」とすることは異ならないことを示している。この記述でも、「法に鹿妙有り」とされる「能依之法」が、四諦因果によって把握される衆生法を示唆していることは明らかであろう。だが、いかなる意味において「實相」は四諦因果の一切法の「體」とされるのであろうか。『玄義』顯体章は、この記述に先立って、

一に異名を出すとは、「實相之體」は祇だ是れ一法なれども、佛は種種の名を説く。亦た妙有、眞善妙色、實際、畢竟空、如如、涅槃、虚空佛性、如來藏、中實理心、非有非無、中道第一義諦、微妙寂滅等と名く。無量の異名、悉く是れ實相之別號、實相も亦た是れ諸名之異號なるのみ。惑者は迷滯して名を執じて異解す。（同722b-c）

と、「實相之體は祇だ是れ一法」であり、その「實相之別號」として諸經に畢竟空・佛性・如來藏・非有非無・中道第一義諦等の種々無量の異名が説かれることを示している。これと同様の主張は『維摩經玄疏』等の晩年期の諸撰述にも見られるが、さらに『維摩經文疏（広疏）』卷六・釈佛国品では、經文の「説法不有亦不無、以因縁故諸法生」（大正十四・537c）を釈して、

「不有亦不無」とは即ち中道之法なり。「不有」なるが故に俗に非ず、「不無」なるが故に眞に非ず。然るに、説法は本と二諦に約す。既に雙べて二邊を非すれば、何等の法を説かん。當に知るべし、正しく大乘中道を説く。所以はいかん。凡夫は有、二乗は無、菩薩は正しく中道佛性を觀ず。是の故に、大乘方等、諸の菩薩の爲に法を説くに、多く中道を説いて不二法門に入らしむ。故に「不有亦不無」と言うなり。（新統蔵十八・500a）

と、凡夫は有、二乗は無として「法」を觀ずるのに対して、大乘方等では、菩薩を不二法門に入らしめんがために、

所觀の「法」は不有亦不無の「中道之法」であることを説いて「中道佛性」を觀ぜしめるとし、続いて「以因縁故諸法生」について、

「以因縁故諸法生」とは、是れ縁起の用を歎説するなり。縁起に二種有り。前に説くが如し。今、此の歎文、備さに二種の縁起を含ず。

法の體、既に不有不無、豈に生有るを得ん。因縁有るが故に亦た生を説くを得るとは、界内の無明見思惑の因縁を以ての故に、即ち【生】滅の苦集生じ、無生の苦集生じること有り。無明見思を滅するに因るを以ての故に、則ち生滅の道諦生じ、無生の道諦生じること有り。

〔校訂に従い【生】を補う〕

界外の無明塵沙無知を以ての故に、故に無量の苦集生じること有り。無明塵沙無知を滅するに因るを以ての故に、故に無量の道諦有り。法界無明を以ての故に、故に無作の苦集生じること有り。法界無明を滅するに因るを以ての故に、故に無作の道諦生じること有り。故に「以因縁故諸法生」と言うなり。

四種の道諦生じること有るが故に、即ち四種の滅諦有り。之を名けて無と爲す。

是れ不有不無にして有無を雙照するを明すなり。

（新統蔵十八・500b～c）

と、菩薩所觀の不有不無の「法」（中道之法）の「體」に「生」（有無）は無く、界内の無明見思惑と界外の無明塵沙無知の二種の因縁によつて、四種（生滅・無生・無量・無作）の四諦の「諸法」の「生」（有無）のあることを示している。この『文疏』の記述は、『玄義』等に佛性・中道・非有非無（不有不無）等が「實相之體」の別号とされることを考え併せてみると、先の『玄義』顯体章の記述が、能依の四諦因果の一切法について「若し然るに廣く開すれば、即ち四種の四諦を成ず」と述べるに止まるところを広説したものと理解することができよう。そして、この四種の四

諦因果の「諸法」の麁妙は、前項に引用した『玄義』の記述に示されるように、「名」をもって衆生に施設される「法」の麁妙、すなわち蔵（生滅）・通（無生）・別（無量）・円（無作）の四教に説示される四諦の麁妙に基づいて生じるものと考えてよいであろう。

三 蔵通別円四教の麁妙と円融三諦

だが、いかなる理由から佛教に蔵・通・別・円の麁妙が生ずるのであろうか。この四教の次第浅深について、『玄義』巻二上に絶待妙を明す中では、次のように述べられている。

二に絶待に妙を明さば、四と爲す。

一には隨情の三假の法起るに、若し眞諦に入れば、待對、即ち絶す。故に身子の云く、「吾聞く、解脱の中に言説有ること無し」と。此れ三藏經中の絶待の意なり。

二には若し隨理の三假は、一切の世間、皆な幻化の如く、事に即して而も眞、一事として而も眞に非ざる者有ること無し。更に何物に待して眞ならずと爲んや。彼の三藏に望むるに、絶は還りて絶ならず。即事而眞、乃ち是れ絶待なり。此れ通教の絶待なり。

三に別教、若し起れば、即眞之絶を望むるに、還りて是れ世諦なり。何となれば、大涅槃に非ざれば、猶お是れ生死の世諦なり。絶、還りて待有り。若し別教の中道に入れば、待、則ち絶す。

（大正三三・636c～637a）

まず、ここに言う「絶待」とは、『玄義』巻一下・七番共解の四悉檀釈に、『大智度論』に拠って、

四に第一義悉檀とは、二種有り。一には不可説、二には可説なり。不可説とは、即ち是れ諸佛・辟支佛・羅漢の

所得の眞實法なり。偈を引きて云く、「言論、盡き竟り、心行も亦た訖んぬ。不生不滅の法は涅槃の如し。諸の行處を説くを世界と名け、不行處を説くを第一義と名く」⁽¹⁵⁾と。（大正三三・687a）

と述べられるように、諸佛・辟支佛・阿羅漢の所得の「眞實法」、すなわち四教それぞれに言語道斷・心行処寂であることが説示される「第一義」を示唆するものと考えてよいであろう。そして、藏教の場合は、凡夫が実有と執ずる森羅万品を因成仮・相待仮・相続仮の三仮に破析する析空観によって獲得される真諦を「絶待」とし、通教の場合は、この藏教所得の「絶待」に待して、森羅万品を如幻化と体する体空観に基づく「即事而真」の真諦を「絶待」とし、さらに別教の場合は、通教所得の「即眞之絶」に待して、別教證道所得の中道を「絶待」とするのである。このように、藏通別三教がいずれも前教の「絶待」よりも高次の「絶待」を説示するのに対して、円教に説示される「絶待」は、

四に圓教、若し起れば、無分別法を説く。邊に即して而も中、佛法に非ざる無し。亡泯して清淨なれば、豈に更に佛法を佛法に待せんや。如來法界なるが故に、法界の外に出でて、復た法として相い形比す可べきもの有ること無し。誰に待して僦と爲し、誰に形^{なづ}えて妙を得んや。待す可き所無く、亦た絶する所無し。知らず、何をか名けて強いて言いて絶と爲さん。大經に云く、「大とは不可稱量、不可思議に名く。故に名けて大と爲す。譬えば、虚空の小空に因らざるが如きを名けて大と爲す。涅槃も亦た爾り。小相に因らざるを大涅槃と名く」⁽¹⁷⁾と。

妙も亦た是の如し。妙は不可思議に名く。僦に因らざるを而も名けて妙と爲す。若し定んで法界の廣大獨絶なる有りと謂わば、此れ則ち大いに有とする所有り。何ぞ謂いて絶と爲んや。今は法界清淨にして、見聞覺知に非ず、説示す可からず。文に云く、「止みなん、止みなん、説く須からず。我が法は妙にして思い難し」と。「止止不須

説」は即ち是れ言を絶し、「我法妙難思」は即ち是れ思を絶するなり。又た云く、「是の法は示す可からず。言辭の相、寂滅す」と。亦た是れ絶歎之文なり。待を以て示す可からず、絶を以て示す可からず。待を滅し、絶を滅するが故に「寂滅」と言うなり。
(同697a)

と述べられるように、藏通別三教のように前教の「絶待」に待して自教の「絶待」を「待」(思議)するのではなく、「待」(思議)そのものを絶する「絶待」・「不可思議」であり、「妙」についても同様に「能に因らざるを而も名けて妙と爲す」ものとするのである。もちろん、この記述のみから円教の「絶待」を理解することは難しい。だが、『玄義』卷二下・境妙段の四諦境には、

無作とは、中に迷うこと輕きが故に、理に従いて名を得。理に迷うを以ての故に、「菩提是煩惱」なるを集諦と名け、「涅槃是生死」なるを苦諦と名く。能く解するを以ての故に、「煩惱即菩提」なるを道諦と名け、「生死即涅槃」なるを滅諦と名く。事に即して而も中、思無く、念無く、誰の造作する無し。故に無作と名く。大經に云く、「世諦とは即ち是れ第一義諦なり。善方便有りて、衆生に隨順して説くに、二諦有り。出世の人、知れば即ち第一義諦なり」⁽¹⁸⁾と。「一實諦とは、虚妄無く、顛倒無く、常樂我淨」⁽¹⁹⁾等と。是の故に名けて無作四聖諦と爲す。
(同701b)

と、円教では、一切のいかなる「事」(四諦因果)も「理」の迷解によって生起する「事に即して而も中」の無作四諦の「境」として説示されることが示されている。この記述を参照してみると、円教の場合には、先の引用中にも「豈に更に佛法を佛法に待せんや」とあるように、藏通別三教のように六道及び三乗の九法界が現にいま直面している「如來法界」(佛法)の外に「待」(思議)によって「絶待」(佛法)を追い求めることではなく、そうした言思の⁽²⁰⁾

「待」を絶して、凡夫生死の「有邊」も、二乗涅槃の「無邊」⁽²¹⁾も、「邊に即して而も中」であり、六道四聖のいかなる「法」も「佛法に非ざる無し」と了知することが、そのまま「法」の「絶待」・「不可思議」・「妙」を了知することとして示されていると考えてもよいのではないだろうか。

さらに、『玄義』巻八下・顕体章では、藏通別円四教の鹿妙と即空・即仮・即中の三諦との連関が、次のように示されている。そこでは、まず涅槃經聖行品を引用して、

大經に云く、「一實諦は則ち二有ること無し。二有ること無きが故に一實諦と名く。又た一實諦は無虚偽に名く。又た一實諦は顛倒有ること無し。又た一實諦は魔の所説に非ず。又た一實諦は常樂我淨に名く」⁽²²⁾と。常樂我淨は空假中之異なり無し。異なれば則ち二と爲す。二なるが故に一實諦に非ず。一實諦と即空即假即中とは無異無二なるが故に一實諦と名く。若し三の異なり有れば則ち虚偽と爲す。……（中略）……。三の異なり無きが故に顛倒無し。無顛倒の故に一實諦と名く。異なるは一乗と名けず。三法不異にして、具足圓滿するを名けて一乗と爲す。是の乗、「高廣にして衆寶莊校」⁽²³⁾の故に一實諦と名く。……（中略）……。一實諦は即ち是れ實相、實相は即ち經之正體なり。〔同(81b)〕

と、常樂我淨の「一實諦」と「即空即假即中」とは無異無二であり、また「一乗」とは空假中の三法の具足圓滿を言い、「一實諦」＝「即空即假即中」＝「一乗」の「實相」が法華經の「經之正體」であることを示し、その上で、是の如きの實相は即空假中なり。即空の故に一切凡夫の愛論を破し、一切外道の見論を破す。即假の故に三藏四門の小實を破し、三人共見の小實を破す。即中の故に次第の偏實を破す。復た諸の顛倒・小・偏等の因果、四諦之法無く、亦た小・偏等の三寶之名無く、唯だ實相因果のみ有りて、四諦、三寶、宛然として具足す。亦た諸の

方便因果、四諦・三寶を具す。何を以ての故に、實相は是れ法界海なるが故に。唯だ此の三諦は即ち是れ眞の實相なり。

(同781b~c)

と、即空即仮即中の「實相」は、「即空」によって凡夫外道の愛論・見論とその愛見によって生起する顛倒の因果を破し、「即假」によって但空に止まる藏通二教の小実とその因果（生滅四諦・無生四諦）を破し、「即中」によって凡夫・二乗の境界を超えた中道実相に入るためには歴劫修道を要するとする別教の次第偏実とその因果（無量四諦）を破し、それと同時に「即空即假即中」の「實相因果」（無作四諦）のみの有ることを顯すするのである。つまり、円教における「即中」（即邊而中・即事而中）の説示によって、藏通別三教の「即空」・「即假」の説示により生起する「方便因果」（生滅・無生・無量四諦の麁法）を含めて、あらゆる四諦因果の「法」が等しく「實相」（即空即仮即中）の迷解によって生起する「實相因果」（無作四諦の妙法）であることが開顯されるのである。また、所依の「實相」（體）が「即空即假即中」であることによって、引用中にも「諸の方便因果、四諦・三寶を具す」とあるように、能依の四諦因果の「一切法」、すなわち六道四聖の「十法界」は、「顛倒因果」（六道）と「方便因果」（三乗）を具す、權実不可思議の「妙法」であることが主張されるところと考えてよいであろう。

そして、先の「一乗」を空仮中三法の具足円満とする記述に先立って、

此の經は「汝、實に我が子」⁽²⁵⁾なれば、復た四の三之人無く、「十方に諦かに求むるに更に餘乘無し」⁽²⁶⁾と。

(同781b)

と述べられているように、唯一佛乘であることを開顯する法華經は、円融三諦、あるいは無作四諦・一実諦といった円教教理に直接的な言及が見られなくとも、三乗の方便因果の人無く、「唯だ實相因果のみ有り」と明かすことによ

って、いかなる四諦因果の「諸法」も「思無く、念無く、誰の造作する無し」のままに「實相」（円融三諦）の「妙法」であることを衆生に施設する円教經典として理解されるとき考えられるのである。

四 小 結

以上に概観したように、天台智顗の生死観の基盤が、諸佛によって施設された「法」（名）にしたがって、「底惡の生死」・「下劣の小乗」を含めた一切の「法」を「即邊而中」・「即事而中」の「妙法」・「實相因果」と捉えることに存することは明らかであろう。先の『玄義』絶待妙の記述が示すように、煩惱生死の凡夫衆生に現前する「法」の「境」の外に「如來法界」は無く、また『止観』卷一上・發大心に円教における發心を示して、

無作を推すとは、夫れ法性と一切法は無二無別なり。凡法、尚お是なり。況んや二乗をや。凡法を離れて更に實相を求むるは、此の空を避けて彼の處に空を求むるが如し。凡法に即して是れ實法なれば、須く凡を捨てて聖に向うべからず。經に言く、「生死即ち涅槃」と。一色一香、皆な是れ中道なり。是れを無作四諦を推して上求下化する菩提心を發すと名く。

（大正四六・6a-b）

と述べるように、法性と一切法は無二無別であり、「凡法に即して是れ實法」のゆえに、この「凡法」を離れて「實相」を求めてはならないのである。そして、同じく『止観』卷六下・觀陰入境界の破法遍に、

衆生と言うは、貪・恚・癡の心に皆な我有りと計す。我は即ち衆生なり。我は心を逐うて起る。心、三毒を起すは、即ち衆生と名く。此の心の起る時、即空即假即中なり。心の念を起すに隨いて止觀具足す。觀を佛知と名け、止を佛見と名く。念念の中に於て、止觀現前するは、即ち是れ衆生、佛知見を開くなり。此の觀、成就するを初

隨喜品と名く。

(同85a)

と述べられているように、計我の三毒の「此の心の起る時、即空即假即中」であるからこそ、別教のように入空觀・入假觀の二觀を成じた後に、中道觀に入るものと佛道を理解するのではなく、凡夫衆生に現前する陰入界・煩惱・病患等の「境」において、その「實相」(即空即假即中)を緣じる一心三觀・円頓止觀が修されなければならないことが主張されると考えてよいだろう。

要するに、天台智顗によって示される生死觀とは、一心三觀の実践を説く觀門を含めて、煩惱生死の衆生こそが「何の法か収めざらん」・「何の智か發せざらん」の「諸法」(不思議境)に外ならないことを自覺し、凡法を捨てるのではなく、衆生の「法」(境)の「實相」(境妙)を凝視しなければならないことを教えるものと言えるであろう。

註

- (1) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(以下、『法華經』と略す)卷一方便品第二に、「是法住法位。世間相常住。於道場知已。導師方便説。」(大正九・5b)、「甚深微妙法。我今已具得。唯我知是相。十方佛亦然。」(同6c)とある。
- (2) 福田堯頼『天台学概論』では、円融三諦の根拠について、「天台大師の受法の師たる南岳大師慧思禪師は、『是の相なり、是の性如なり、是の体如なり』等と讀んだと云われ、天台大師は之れに暗示を得て斯の文を三轉讀せられた。……(中略)……。斯くの如く、方便品十如實相の經文を三轉讀して以て三諦の圓融相即せる事を明かせるものであり、今家の三諦圓融の教理は、實に法華經を根據として居るのである。」(二一頁)と述べられている。これによれば、法華經に円融三諦が説示されることの根拠は、法華經そのものではなく、南岳慧思より師資相伝した十如是の三轉読に求められることになる。
- (3) 『玄義』卷二上では、「廣説者。先法次妙。南岳師學三種。謂衆生法佛法心法。」(大正三三・663a)と、「妙」である

ことが論じられる「法」に、心法・佛法・衆生法の三種を挙げている。このうちの衆生法の語義については、本稿と一部重複するが、拙稿「衆生法と因果」（山喜房佛書林刊『多田孝正博士古稀記念論文集』所収）、同「天台大師における衆生について」（『印度学佛教学研究』第五十四卷二号所収）を参照されたい。

- (4) 『法華經』卷一方便品第二の冒頭に、「爾時世尊從三昧安詳而起。告舍利弗。諸佛智慧甚深無量。其智慧門難解難入。一切聲聞辟支佛所不能知。」（大正九・5d）とある。

- (5) 同じく『法華經』卷一方便品第二に、「我始坐道場。觀樹亦經行。於三七日中。思惟如是事。我所得智慧。微妙最第一。衆生諸根鈍。著樂癡所盲。如斯之等類。云何而可度。」（大正九・5c）とある。

- (6) 『法華經』卷一方便品第二の「十如是」に続く偈文の中で、「又告舍利弗。無漏不思議。甚深微妙法。我今已具得。唯我知是相。十方佛亦然。」（大正九・6a）と述べることを要述したものと考えられる。

- (7) 『玄義』卷二下 境妙段・列数には、「然衆經赴緣明境甚衆。豈可具載。略舉六種。六種次第者。十如是此經所說故在初。次十二因緣三世輪迴本來具有。如來出世分別巧示。四諦名興從廣至略。次辨二諦。二諦語通別顯中道。次明三諦。三諦猶帶方便。直顯眞實。次明一諦。一諦猶有名相。次明無諦。始從無明終至實際。略用六種足。一明十如境。已如前說云云。」（大正三三・638b）と述べられている。

- (8) 後にも言及するが、十二因緣・四諦等の場合は、藏通別円の四教を通じて説示されるために、『玄義』境妙段に、その「鹿妙」が詳しく判ぜられる。

- (9) 『（南本）涅槃經』卷二五 師子吼菩薩品第二十三には、「善男子。佛性者名第一義空。第一義空名爲智慧。所言空者不見空與不空。智者見空及與不空常與無常苦之興樂我與無我。空者一切生死。不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死。我者謂大涅槃。見一切空不見不空。不名中道。」（大正十二・767c）とある。

- (10) 『法華經』卷四法師品第十に、「決了聲聞法。是諸經之王。聞已諦思惟。當知此人等。近於佛智慧。」（大正九・32a）とある。

- (11) 『玄義』卷二上の「法」の広釈では、「皆稱法界者。其意有三。十數皆依法界。法界外更無復法。能所合稱故言十法界也。二此十種法。分齊不同。因果隔別凡聖有異故加之以界也。三此十皆即法界攝一切法。一切法趣地獄。是趣不過當體即理。更無所依故名法界。乃至佛法界亦復如是。」（同633c）と述べられている。

(12) 『爪上土』の喩えは、『(南本) 涅槃經』卷三十一 迦葉菩薩品第二十四之一(大正十二・869c)に出る。また、『五諦』については、同じく『(南本) 涅槃經』卷十二 聖行品之二(同684a)に出る。

(13) 『玄疏』卷六 弁体章は、『第四一法異名者。諸經異名說眞性實相。或言一實諦。或言自性清淨心。或言如來藏。或言如如。或言實際。或言實相般若。或言一乘。或言即是首楞嚴。或言法性。或言法身。或言中道。或言畢竟空。或言正因佛性性淨涅槃。如是等種種異名此皆是實相之異稱。……(中略)……或信黎耶自性清淨心而毀畢竟空。或言畢竟空無所有毀黎耶識自性清淨心。或言般若明實相法花明一乘皆非佛性。此之求福豈若慮禍。若知名異體一則隨喜之善遍於法界。何所靜乎。』(新統藏十八・457c)と、眞性実相や如來藏・佛性・畢竟空・中道等をいずれも「實相」の異称とする。

(14) 天台智顗の中道佛性と無明についての見解は、『維摩經文疏』卷二十三 觀衆生品釈に詳述されている。拙稿「中道無明と中道佛性」(『天台學報』第四十八号所収) 参照。

(15) 『大智度論』卷一には、「如摩訶衍義傷中說。語言盡竟心行亦訖、不生不滅法如涅槃。說諸行處名世界法、說不行處名第一義。」(大正二五・61b)とある。

(16) 隨情三仮と隨理三仮の相違については、拙稿「天台大師の從假入空觀について」(村中祐生先生古稀記念論文集『大乘佛教思想の研究』所収) 参照。

(17) 『(南本) 涅槃經』卷二十一 德王品第二十二に、「善男子。譬如虛空不因小空名爲大也。涅槃亦爾。不因小相名大涅槃。善男子。譬如法不可稱量不可思議。故名爲大。涅槃亦爾。不可稱量不可思議。故得名爲大般涅槃。」(大正十二・747b)とある。

(18) 『(南本) 涅槃經』卷十二 聖行品第十九之二には、「善男子。世諦者即第一義諦。世尊。若爾者則無二諦。佛言。善男子。有善方便隨順衆生說有二諦。善男子。若隨言說則有二種。一者世法。二者出世法。善男子。如出世人之所知者名第一義諦。世人知者名爲世諦。善男子。五陰和合稱言某甲。凡夫衆生隨其所稱。是名世諦。解陰無有某甲名字離陰亦無某甲名字。出世之人如其性相而能知之。名第一義諦。」(大正十二・664d)とある。

(19) 同右参照。

(20) 『止觀』卷三上 止觀名義は、絶待義について、「世人約種種語釋絶待義。終不得絶。何以故。凡情馳想種種推畫。分別悟與不悟心與不心。凡聖差別。絶則待於不絶。不思議待思議。輪轉相待絶無所寄。若得意亡言心行亦斷。隨智妙悟無

復分別。亦不言悟不悟聖不聖心不心思議不思議等。種種妄想緣理分別。皆名爲待。眞慧開發絕此諸待。絶即復絶。如前火木名爲絶待。」（大正四六・22b）と述べている。

- (21) 「即邊而中」の円教に対して、『止観』卷一上 発大心に「推無量者。夫法性者名爲實相。尚非二乘境界況復凡夫。出二邊表別有淨法。如佛藏經十喻云云。是名推無量四諦上求下化發菩提心。」（大正四六・5c）、また『玄疏』卷六 弁体章に「一約不共般若別教明法性實相。斷除二障離生死涅槃二邊。別以不空之理自性清淨心如來藏理爲法性實相。」（新統藏十八・454c）、やうに『四教義』卷二 弁四教所詮に「三中道第一義諦者。遮二邊故說名中道。言遮二邊者。遮凡夫愛見有邊。遮二乘所見無名無相空邊。遮俗諦眞諦之二邊。遮世諦第一義諦之二邊。遮如此等之二邊。名爲不二。不二之理目之爲中。」（大正四六・727c）とあるように、別教の場合、「中道」は凡夫生死（有辺）と二乘涅槃（無辺）の二辺の境界を超えた「淨法」として捉えられる。

- (22) 『南本』涅槃經』卷十二 聖行品には、「文殊師利菩薩白佛言。世尊。所言實諦其義云何。佛言。善男子。言實諦者名曰眞法。善男子。若法非眞不名實諦。善男子。實諦者無顛倒。無顛倒者乃名實諦。善男子。實諦者無有虛妄。若有虛妄不名實諦。善男子。實諦者名曰大乘。非大乘者不名實諦。善男子。實諦者是佛所說非魔所說。若是魔說非佛說者不名實諦。善男子。實諦者一道清淨無有二也。善男子。有常有樂有我無淨。是則名爲實諦之義。」（大正十二・685a-b）とある。

- (23) 『法華經』卷一 譬喻品第三に、「爾時長者。各賜諸子等一大車。其車高廣衆寶莊校。周匝欄楯四面懸鈴。」（大正九・12c）等々ある。

- (24) 前註（21）参照。

- (25) 『法華經』卷二 信解品第四の長者窮子喻の中に、「此實我子。我實其父。」（大正九・17b）とある。

- (26) 『法華經』卷一 譬喻品第三に、「與諸菩薩。及聲聞衆。乘此寶乘。直至道場。以是因緣。十方諦求。更無餘乘。」（大正九・15a）とある。また、これに先立つ方便品第二には、「如來、但以一佛乘故、爲衆生說法。無有餘乘、若二、若三。」（同7b）、「諸佛如來言無虛妄。無有餘乘、唯一佛乘。」（同7c）とある。